「“茶”の笑い」を見つけよう

㈱アルティスタ人材開発研究所代表　玄間千映子

日本人の心模様

今日では、茶といえば「お茶」のことだと、つい思います。ところが、そのお茶には、番茶もあれば緑茶もあります。番茶は文字通り茶色をしていますが、緑茶の色味は緑色。にもかかわらず、いずれも“茶”というのには、別の意味がありました。

江戸ブームの火付け役、杉浦日向子著「うつくしく、やさしく、おろかなり」によると、「ふっと緊張感の解ける、筋肉のゆるむ、そんな時間的空間のこと」を日本では“茶”といった、とあります。確かにお茶を戴くときには、緊張感は解け、心は和むもの。茶が大陸からやってきた中世の頃、今でいう「ティータイム」のことを“茶”と称した当時の日本人の語彙感覚をあっぱれとすら思うのですが、ちなみに大字源によると“茶”とは「小さな女の子の美称」ともあります。「お茶目だね」という、アレですね。お茶目な女の子を見ると、思わず頬が緩むのは今日でも同じです。緑色でも緑茶というのも、“茶”がこんな意味であるなら頷けます。

「“茶”の笑い」とは、そういう意味を伴った空間に生まれるという、行間ならぬ、情感と情間が瞬時に汲めることで生まれる笑いであり、存外、知的水準を求められる「上品な笑い」なのであります。

日本人の“遊び”の空間

さて、心模様は色味となって映ります。そのような心的空間を“茶”とした日本人は江戸町人文化の開花と共に、「団十郎茶」「利休茶」等々の“茶”色を数多く生みだしました。植物など、自然の名前を掲げた色味でないことにご注目。茶色には、まるで「〇〇好み」というような芸能・文化を広めた有名人の名を付けたのです。こんな所にも、江戸町人の遊び心が見え隠れします。そのように町民文化が花開いた江戸の頃、一方で幕府の財政が逼迫したため奢侈禁止令なるものが施行され、庶民から町人文化の芽を摘み取っていきました。

ところが、もとより江戸庶民が楽しんだ“茶”という感覚は心の持ち方であって、物欲（喫茶そのもの）ではありません。そのため質素勤勉の下でも、この遊び心を江戸庶民は遺憾なく発揮し、様々な色を捻り出しました。もとより庶民が使える色は、茶色や鼠色（ねずいろ）といった地味な色味のみという時世の下、茶色には御法度の文化の香りが付きすぎていましたから、次第に遊び心は鼠色の開発へと移行。「梅鼠」「紅鼠」等々の赤系にはじまり、黄色系、緑系、青系、紫系に加えて茶色系に及ぶ鼠色を生み出し、皮肉にも多種多様を意味する「四十八茶百鼠」という言い回しを伴って、更に江戸の町民文化に深みを持たせることになりました。こんな時、「あらあら、クスッ」と笑えたら、「“茶”の笑い」も習得です。

ところで、こうした傾向はもとより、物より心に呼応できる日本人の資質があってこそ生まれたというものです。「もてなす文化」にも通ずることではありますが、日本人の発想の強みは、速さ安さという大量生産によるものよりも、心の快適さを提供する空間にこそ、その強みがあるといえそうです。

その強みを身につけるには、日々の仕事の中でも、「“茶”の笑い」をすくい取るという心の遊びを励行しましょう。ひいてはそれが、相手の心を先読みする力を鍛えることになりそうです。

筆者紹介

玄間千映子（げんま・ちえこ）

㈱アルティスタ人材開発研究所代表。國學院大学卒。米インマヌエル大学大学院卒後、米スタンフォード大学ビジネススクール修了。財団法人日本船舶振興会(現日本財団)役員、国会議員各秘書を経て1994年に前身の(有)アルティスタを設立し代表に。2006年現社名に改組。日本大学大学院非常勤講師、（財）港湾空間高度化環境研究センター監事などを兼任。著書に「ジョブ・ディスクリプション一問一答」「リストラ無用の会社革命」など。